慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「源順百首」の特質と初期百首の展開
Sub Title	
Author	金子, 英世(Kaneko, Hideyo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1993
Jtitle	三田國文 No.19 (1993. 12) ,p.1- 10
JaLC DOI	10.14991/002.19931200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19931200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「源順百首」の特質と初期百首の展開

金子　英世

一　はじめに

「源順百首」と呼称されている百首歌は、曾禰好忠が創案した百首歌に、源順が応和するという形で成立したと考えられているものである。しかしこの百首は、『曾禰好忠集』に所載されており、順自身の家集には見えないこと、また順作とする根拠が曖昧であること等の理由によって、かつてこれを疑問視する説も提示された。[1]

順作を想定する根拠は、当該百首の序のはじめに記された「源順これをみてかへししたりとなむ」という一文であるが、「これ」というのが何を指すのか不明確な上に、後人のさかしらである可能性も否定できないことから、源順の和歌作品として位置づけるべきかどうか、問題を残しつつ今日まで扱われてきた。[2]稿者も以前、初期百首の成立を考察するにあたって「源順百首」を順作と見る立場で発言したことがあるが、[3]改めてこの問題にたち返って考えてみる必要があるかと思われる。

これまでにも、本百首の表現分析を行うことによって作者を想定しようとする試みはいくつか提出されている。例えば蔵中スミ氏は、好忠百首・順百首の表現傾向を細かく分析され、「両者の類似性は極めて乏しい」と述べられた上で、本百首を「源順による好忠への歩み寄りの試み」と位置づけられた。[4]

最近では西山秀人氏が、康保三（966）年の成立か、とされる順の屏風歌表現の検討から、本百首を順作と想定するべきか否かという問題に言及されており、[5]また別のところでは順の屏風歌等にも河原院周辺歌人詠、とりわけ好忠詠との間に表現的連関が認められるという注目すべき指摘をされている。[6]

また「源順百首」は、好忠によって創案された百首歌に最も早く応じた作品であり、その成立時期から見て、初期百首の性質や方向性を決定づける上で、重要な役割を果たしたと想像されるものである。そうした観点からも、本百首の特性については十分に検討される必要がある、と稿者は考える。

そこで本稿では、「源順百首」の詠歌の趣向に着目してその背景と特質を考察し、さらには当該百首を順の作品として考えることの妥当性をはかる一視点としたい。「源順百首」には、同時代の一般的な季節歌の詠みぶりとは些か異なる趣の詠歌が見られるのであり、その性質を鑑みることによって、後続の初

期百首作品に及ぼした影響やその展開などと併せて、作者について考えたい。

二　「源順百首」の趣向的特色

以下で「源順百首」に於いて、詠作者の特性を窺わせていると思われる詠歌や初期百首の展開において意味を持つと考えられる詠歌を取り上げ、具体的に検討を加える。[7]

（一）立春解氷のさざなみ

① 山かはのうすらひわけてさゞなみのたつは春べの風にやあるらむ（春・484）

右は「源順百首」巻頭歌である。主題は「立春解氷」という一般的なものではあるが、解氷という現象を「春べの風」に伴って生じる「さゞなみ」として視覚的に表現している点に特色が認められる。同様の趣向は

水のおもにあやふきみだる春風や池の氷をけふはとくらん（『後撰集』春上・紀友則・11）

等にも見られ、右の後撰集詠は古来指摘があるごとく

柳無気力条先動　池有波文氷尽開（『和漢朗詠集』立春・白・4）

を踏まえていると考えられている。①の歌は「山かは」を詠んで趣を異にしているものの、解氷に伴う「波」によって視覚的に春風を捉えようとする発想に、右のような漢詩句との親近性が感受される。

当該歌の、「霞」に先立つ、立春の題材としての「山河の解氷」という着眼も新しいものである。後続する初期百首の展開には、「山河の解氷」という題材の流行が認められるのだが、[8]例えば和泉式部百首の巻頭歌、

春がすみたつやをそきと山河の岩間をくぐる音きこゆなり（『和泉式部集』・1）

は、聴覚的要素を付加した「山河の解氷」詠であり、①の流れを汲むものと考えられよう。[9]

さて、以前に拙稿で述べた如く、好忠百首・春部の第一首目も、漢詩的発想を下敷にしたことが想像される新趣の立春詠であった。[10]それに応じる形で成立した本百首に於いても、この巻頭歌には好忠百首と同様の指向が認められるといえるのではなかろうか。当該歌の、「うすらひわけて」の表現に示された微細な現象を捉える視点も、同時代和歌のあり方に比して、明らかに進んだものであると思われる。

つまり、百首の巻頭歌という重要な位置を占める当該歌には、好忠百首の特性と同じく、漢詩文的な発想等を応用した新趣の季節詠を詠もうという意図が窺われるといえよう。

（二）東方の立春

② 東路のゆきかふみちの春たゝば花みて心やらざらめやは（春・486）

当該歌に見られる「東路の立春」という主題は、おそらく五行思想に基づいているものと想像される。同様の趣向を用いた詠歌は、次に挙げるように好忠・恵慶の百首にも見出される。

a　いづくともわかずかすめるあづまのゝをくほのとまも春め

きぬらし　（好忠百首・春・370・為相本系独自歌）

b　東路に春やきぬらんあふみなるをかだの原に若菜むれつむ

（恵慶百首・春・199）

こうした発想が示された例は、漢詩文に於いては、

誰言春色従「東到」　露暖南枝花始開

（『和漢朗詠集』梅・菅三品・92）

がある。和歌に於いては、

c　春はまづあづまぢよりぞ若草のことのはつてよむさしのの風

（『古今和歌六帖』384・2864に重出）

d　雪ふかく行くあづまぢは遠けれどみちにて春にあひぬべきかな

（『中務集』・屏風歌・59）

が見出されるが、用例は非常に少ない。dの詠者、中務も河原院周辺の新趣向形成に関わっていたと目される人物であり、東方の立春に着目するという趣向が彼らの間で共有・展開されたものであることを想像させよう。

また、②の歌の発想と言語技巧「路―行く―（心）遣る」は、好忠の『毎月集』の歌に応用されている。

e　道遠みものうしと思ふ春のゝも花見るときぞ心ゆきぬる

（『毎月集』三月上・66）

このように初期百首の展開においては、歌の発想のみならず、言語技巧というレベルにおいても、積極的な享受が認められる。また、順の屏風歌などに顕著な詠風として言語遊戯性の強さという点が指摘されているが、本百首にも少なからずそうした性質が存するようである。但しそれは、必ずしも屏風歌と同質のものではなく、そこには定数歌と屏風歌との詠作意識の相違があるように思われる。

（三）眺望的視点と水辺の植物

③　見渡せば淀のわかごもからなくにねながら春をしりにけらしも（春・488）

当該歌は、『古今集』恋五・759の「山城の淀のわかごもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき」に依拠した季節歌である。第四句の「ねながら」には、『全釈』[11]が指摘される通り、「寝ながら」と「根ながら」が掛けられていると考えられ、やや誹諧的な趣が感受される。当該歌も言語遊戯性が強い詠歌であろう。

ところで③は、「見渡せば」という初句を有し、眺望的視点を有する詠歌である点が注目される。こうした河原院周辺歌人による眺望的視点の獲得の経緯については、万葉歌・漢詩文、両面からの影響が想定されている[12]。近藤みゆき氏のご論に拠れば、③は「見渡せば」詠流行の最初期に位置し、好忠の『毎月集』を初めとする河原院周辺歌人に影響を与えたと思しきものである。また、早春の水辺の景を捉えるという趣向においても、好忠の『毎月集』詠（後にfとして掲出する）に先立つ「水辺立春詠[13]」として、当該歌は注目すべき存在であるといえよう。

稿者は、初期百首の展開に「新趣向導入の場」という特性を見る立場から、当該歌の有する意義に注意したい。好忠百首を受けて成立した本百首に、当該例の如き新趣の表現が複数包含されたことによって、後続の百首の創作が触発され、延いてはそれらの性格を決定づけることになったと思われるからである。

さらに、『毎月集』に至る眺望詠の展開について、屏風歌と

の関わりを検討しておきたい。順の屏風歌に

海のつらに、しほやき、あみひく

a　見渡せばあまのたくなは名のみして立つはしほやく煙なりけり　（『源順集』・女五男八親王の御屏風の歌・[14]209）

という歌がある。これは、③の歌にあった「見渡せば」の表現が、屏風歌に応用されたものと考えられよう。③の歌は先に述べたように、水辺の景を広く捉えるという、従来の平安和歌には認められなかった眺望的視点を有している。こうした眺望的視点を支える「見渡せば」の表現が、屏風歌に於いては画面を総括的に詠む方法として有効であったろうことは想像に難くない。

重之百首、及び好忠の『毎月集』には、aの歌に類似した趣向を持つ、次のような歌がある。

b　春の日のうらゝごとにいでてみよなにわざしてかあまはくらすと　（重之百首・春・229）

c　煙たつ春のうらゝ見るときぞまだ見ぬあまのありかをもしる　（『毎月集』二月中・48）

d　はるゝとうらゝけぶりたちわたりあまのひよりにもしほやくかも　（同・二月終・55）

aとbの先後関係は不明だが、これらは「あま」を素材としているという点だけでなく、広角的視野で海辺の様子を捉える、という方法においても、共通性が感じられる。『毎月集』春歌に於ける「あま」詠の背景に屏風歌の影響があることは、松本真奈美氏によって既に論じられているが、[15]このような視点が確立される過程において、「見渡せば」を出発点とする屏風歌詠作の広がりが、初期百首の世界に大きく関わっていることを想像させよう。

再び③の歌について述べたい。当該歌で、もう一つ注目したいのが、早春の「こも」の「根」という素材である。

e　難波江におひいづる葦のほどみれば数知らぬよぞ思ひやらるゝ　（重之百首・春・222）

f　みしま江につのぐみわたるあしのねのひとよばかりに春めきにけり　（『毎月集』一月初・3）

③、そして右のe・fには、「こも」「葦」といった水辺の植物の根（発芽）への着眼がある。e・fは、前に言及した水辺立春詠としての③の特性を、「難波江」「三島江」という歌枕を伴う形で継承していることにも注意しておきたい。

fの「つのぐむあし」という語が、

氷消二田地一蘆錘短　春入二枝条一柳眼低　（『和漢朗詠集』早春・元・9）

紫塵嫩蕨人拳レ手　碧玉寒蘆錘脱レ嚢　（同・早春・野・12）

等の漢詩文表現に学んだものであろうことは、古くから指摘されている。このように、漢詩文には早春の水辺の植物をよむ類型が存する。fだけでなく、これら一連の「こも」「葦」に対する初期百首詠の素材認識は、同様の漢詩文的背景によって成立していると考えるべきではあるまいか。

さらに「源順百首」には、

④　沢田川ゐでなるあしの葉わかれてかげさすなへに春ふけにけり（春・491）

の詠歌が存し、右の傍線部は、

咽レ霧山鶯啼尚少　穿レ沙蘆笋葉纔分
（『千載佳句』早春・元・3）

を踏まえたかと考えられるものである。これは春の「葦」「こも」など、水辺の植物への注目の背景に漢詩文の存在があったことを裏付ける用例といえよう。

また、③の歌を晩春の景に詠み換えたかと思われるものが『毎月集』に見えるのでここに挙げておく。

過ぎぬらん月日も知らず春はただ淀の若こも刈るもてぞし
る　（『毎月集』三月終・85）

『毎月集』には、先行百首の新趣向を受容し、季節の設定を変えて詠み換えたものが多く見出される[16]のだが、これもそのような一例と見做し得よう。

（四）野の繁茂

⑤　子の日すと見しほどもなく草まくらむすぶばかりに野はなりにけり（春・489）

初期百首に於いて「夏草の繁茂」というテーマが展開されている点については、既にいくつかの観点から言及がなされている[17]。ここでは傍線を付した「～ばかりに（野は）なりにけり」という表現に注目してみたい。

a　よそに見しおもあらの駒も草なれてなつくばかりに野はなりにけり　（好忠百首・夏・385）

b　冬ふかく野はなりにけりあふみなるいぶきのと山雪ふりぬらし　（好忠百首・物名―きのと・452）

c　夏草はむすぶばかりになりにけり野飼ひの駒やあくがれにけん　（重之百首・夏・242）

d　野辺見れば草わくばかりなりにけりわが苗代もおいやしぬらん　（『毎月集』四月初・100）

e　夏草はすべて枕になりにけり旅行く人のやどにかるらん　（『賀茂保憲女集』夏・40）

いずれにも、同一表現と野（草）の状態で季節の進行を知るといった趣向の展開が認められよう。特にaからcへは「夏の駒」という素材についても顕著な結び付きを認めることができる。

そうした初期百首に於ける表現受容という特性はさておき、ここで問題にしたいのは、冬歌であるbは別として、一連の夏歌の流れの中で何故に⑤だけが春歌として詠まれているのか、という点である。

周知の通り、「若菜摘み」のような題材は春歌の典型的なものといえようが、「むすぶばかり」という表現が夏歌に多出するものであることから見ても、当該歌の春草の詠みぶりが異色であることがわかる。先行する好忠百首のaが夏歌であるので当該歌は意図的に春歌としてよまれていると考えるべきであろう。漢詩文では、

徑草漸生長短緑　庭花欲レ綻淺深紅
亂花漸欲レ迷二人眼一　淺草纔能没二馬蹄一
（『千載佳句』早春・鮑溶・18）
（『千載佳句』春遊・白・854）

のように、春草の成長や色彩を題材としたものが比較的多く見出される。あるいは⑤も漢詩文的素材認識を優先したものかもしれない。春の部にあって、夏の季節感の先取りをねらったも

のと見ることもできよう。初期百首には、新趣向の季節歌の試みを意図してか、季節の制約を比較的緩やかに考えている様子が窺われる。好忠の詠歌にも認められるこうした傾向は、初期百首が自由な詠作の場として機能した一面を物語るものといえよう。

（五）納涼と松の風

⑥　みそぎするかものかはなみたつ日よりまつのかぜ[17]こそふかくみえけれ（夏・498）

当該歌が有する納涼的性質とその展開については以前拙稿に述べたが[18]、少しく補足したい。納涼詠は漢詩文を背景に平安初期の屏風歌において成立し、初期百首で盛んに展開されたものである。特に貫之によって早い段階の試みがなされているのだが、そのうち、

別涼

a　みそぎする河のせ見ればから衣ひもゆふぐれに浪ぞたちける

（『貫之集』延喜二年屏風歌・9）

は、「晩夏の涼風」という趣向と屏風歌の素材である「みそぎ」を組み合わせた詠歌として、当該歌に影響を与えていると思われる。このような例から初期百首の新趣向には、貫之の表現を経由して流れ込んだと見做されるものが少なからず存することが知られる。

さらに⑥の下句について考えたい。「まつのかぜ[17]こそふかくみえけれ」は解しにくく、異文もあるところだが、ここは『全釈』の述べられるように「まつのかぜ」の本文に従うべきであろう。当該歌は、上句に河波として表された、秋の先ぶれであるところの涼風と結び付けて解釈するなら、下句には

池冷水無二三伏夏一　松高風有二一声秋一

（『和漢朗詠集』納涼・英明・164）

の詩句の影響が想定できまいか。「水―風―松」といった組み合わせには、漢詩文的な影が色濃いと言えるであろう。当該歌に認められる、早々と秋の到来を感知するという季節感の先取りは、以後の初期百首に大きく影響している。

同様に、納涼的発想を用いた詠歌として、「源順百首」には

⑦　いはしみづ手にむすびつゝわがきゐるこのしたかげもかれにけるかな（夏・500）

があり、水の涼感、樹陰の納涼といった興味深い要素が指摘される。これについては以前述べたことがあるので、ここでは特に言及しない。

（六）結氷と水音

⑧　ゐせきよりもる水のをとのきこえぬは冬来にければこほりすらしも（沓冠歌―冬・548）

当該歌は結氷によって水音が絶えたことを詠んだものである。これも当時の季節歌としては新しい感覚のものと言ってよいかと思われる。ここでもまた、漢詩文表現との親近性を想像できる。[19]

氷封二水面一聞無レ浪　雪点二林頭一見有レ花

（『和漢朗詠集』氷付春氷・菅・384）

そしてこの、「結氷と水音」の趣向は後続の初期百首で活発な享受・展開が認められる。

a　ゐで河のけふ波音のきこえぬは冬のはじめとこほりすらしも　（恵慶百首・沓冠歌―冬・261）

b　岩まにはこほりのくさびうちてけりもりこしみづもたえて音せず　（『毎月集』十一月中・319）

c　すゞか河やそせの波の音なきはこほりやせゞにむすびとめつる　（『毎月集』十二月終・362）

d　やま河のいはまをわくとさゝらめく水もこほれば音づれぬかな　（重之女百首・冬・64）

e　氷みな水といふ水はとぢつれば冬はいづくも音なしの里　（和泉式部百首・冬・75）

さらにこの趣向を春歌に転換し、立春解氷に伴う水音を詠んだものも見られる。[20]

f　きのふまでこほりて見えし山かはのけふふく風に滝の音する　（重之百首・春・223）

fは、前に（一）の項で述べた本百首巻頭歌に見られる「山河の解氷」という題材を受容している詠歌でもあり、既に言及した通り、聴覚的要素を伴う形で重之女・和泉式部の百首の春歌へとさらに展開されている。

（七）きぎす―鷹狩り―

初期百首、特に重之百首や好忠の『毎月集』に屏風歌的な素材が多く導入されていることは、松本氏によって指摘されているところだが、[21] 既にいくつか述べた如く「源順百首」においても屏風歌の流れに関わりがあると見做し得る和歌素材が散見する。例えば夏歌の「納涼」「みそぎ（なごしのはらへ）」等がそれに当たり、他にも冬歌における「神まつり」（517）・沓冠歌の「蚊遣火」（538）等が見出され、本百首が初期百首に屏風歌に素材を仰いだ新しい歌材を導入していることが知られる。その意味で本百首は、初期百首の四季部が群作季節詠として、より豊富な素材を含有する整備された構成へと展開する方向付けを成したといえるのではなかろうか。

次に挙げる例も、屏風歌から流れ込んだ題材と見做せるものだが、そこには新しい要素が持ち込まれている。

⑨　きゞすなくのべになこひそ冬ごもりかるべきものか人のこゝろは（冬・516）

「きゞす」は『万葉集』では「春雉」という用字が見られる如く、季節歌の世界では春の鳥という認識が存在していたと思われる。先行歌として

a　春雉鳴（きぎしなく）　高圓辺丹（たかまどのへに）　櫻花（さくらばな）　散流歴（ちりてながらふ）　見人毛我母（みむひともがも）　（『万葉集』巻十・1866）

b　春の野にあさるきゞすの妻ごひにをのがありかを人にしれつゝ　（『拾遺集』春・大伴家持・21／『万葉集』巻八・1446）

のような例が存し、初期百首でも、

c　春日野にむれたつ雉の羽音は雪の消え間に若菜つめとや　（重之百首・春・225）

d　春日野の若草山にたつ雉の今朝の羽音に目をさましつる　（『毎月集』四月初・43）

のように春歌として詠まれた例が見出される。

さて、勅撰集の季節歌では、『後拾遺集』冬部に「鷹狩り」詠の素材として「きゞす」を詠むものが現れる。従って当該歌

は「鷹狩り」の中で「きゞす」を詠んだ例としては、かなり早いものと言うことができる。秋・冬の「鷹狩り」という主題自体は、当該歌より屏風歌が先行しており、冬歌の題材として既に一般的であったと思われるのだが、そこに春の鳥という印象のあった「きゞす」を詠み込んだ点に、当該歌の新しさが窺われよう。

また、⑨の初句「きゞすなく」とaの万葉歌との一致は興味深い。

e　きゞすなくかたののはらをすぎゆけば木の葉もことに色づきにけり　（『毎月集』九月中・257）

と、『毎月集』にも同様の表現が見えているので、あるいは万葉表現の受容を意図しているものかも知れない。しかしながら⑨もeも、もとの万葉歌とは季節を異にしている。万葉歌を念頭に置いているのなら、敢えて季節を変えて詠んだということになろうか。

このように初期百首―とりわけ好忠の作品に顕著であるが―には、ある和歌素材を季節の設定を変えて詠むことによって新しい季節歌を見出そうという試みが多く存する。⑨の歌から離れるが、いまひとつ、そうした初期百首の展開に認められる「季節の詠みかえ」の例を示してみたい。

f　めづらしく今日しもかものむれゐるは池のこほりやうすくなるらん　（重之百首・春・224）

g　こち風に氷うすくて池がをものつらゝもへゆるをしのかもとり　（海人手古良集・春・2）

h　かものゐるいりえの氷うすらぎてそこのみくづもあらはれにけり　（『毎月集』正月初・12）

右の如く春歌において、解氷の現象と「鴨」を組み合わせてよんだ類例が見られる。しかし春の情景の中で「鴨（水鳥）」を詠むといった趣向は先行例がなく、これらは冬の屏風絵の「氷池―水鳥」という典型的構図を春歌に置き換えたものではないかと想像されるのである。

『毎月集』の冬歌を見ると、

i　かものゐるすさきのみより氷とぢよりこしなみもおきにおりつゝ　（『毎月集』十二月中・353）

という歌が存する。波線部の一致もさることながら、hとiは相互に季節を変えながらも、明らかに類似性を有していると言い得よう。

さらにf～hの傍線部に共通している「氷うすし」という趣向も新しく、解氷の現象を段階的に捉えようとする視点は、初期百首周辺に特有のものである。それが「春の水鳥」という素材とともに享受されている点も注意しておきたい。ここには初期百首の展開の特質が見て取れる。

初期百首においては大まかな季節の枠組みの中で、四季を通した詠作が行われたと考えられている。こうした群作季節詠の試みによって発見された新たな和歌素材や、季節の詠みかえによって見出された新たな趣向が、題詠以前の季節歌を次第に豊かなものへと作り上げていく役割を果たしたといえるのではなかろうか。

以上「源順百首」の、独自性が認められる詠歌について検討

を加えた。全体として「源順百首」に見出される新趣向には、漢詩文的な素養を背景としたものが多いといえよう。また、後続の初期百首で流行する重要な表現や発想が、少なからず本百首に発していることも確認された。こうした性質は、初期百首の特質を方向づける上で、本百首が担った重要な意義を想像させるものであろう。

初期百首の漢詩文受容は、各作品に共通して現れる性質でもあり、こうした特性が必ずしも本百首の作者を決定づける根拠になるとは言い得ないが、少なくとも作者は、漢詩文的発想とのかなりの親近性を有する者である、ということができる。そのような条件を考慮し、また「見渡せば」の句に見られる眺望的視点の導入やその享受の様相等を考えると、本百首の詠み手として浮かび上がってくる人物は、やはり源順であろう。屏風歌素材の導入についても、屏風歌を多く残している順らしいあり方といえる。

三　結び―遊戯技巧歌と「源順百首」の作者について―

ところで、好忠が創案した百首歌の形式は、二つの異質な方向性の詠歌群から成っていると見ることができる。好忠百首は前半が四季・恋という主題中心の歌群、後半が沓冠・物名歌という技巧中心の歌群で構成されており、両者の性質の違いは明らかである。[22]

好忠百首がこのように一見、二つに分裂した構成で成立したのはなぜだろうか。重之百首の如く主題中心の歌群で全体をまとめることも当然ありえたはずである。その理由として稿者は、「好忠が百首歌を創案する際に、それを送る相手として、遊戯技巧歌を得意とする人物を念頭に置いたからだ」と考えるのが自然であるように思う。無論、好忠自身の遊戯技巧歌に関する興味ということもあろうが、四季・恋という伝統的な主題の歌のみならず、後半に遊戯技巧歌を取り入れるという構成には、親しい相手への軽い挑戦のような気持ちが感じられるのではなかろうか。つまり、構成上の分裂よりも、送り手への配慮を優先させたわけである。とすれば、その相手として適当なのは、遊戯技巧歌を得意とし、好忠と親しかった人物ということになろう。百首歌が成立の段階で相手の応和を前提としたことの意味は意外に大きいのではないかと稿者は考えている。

周知の通り「源順百首」は好忠百首に対する「返し」として詠まれたものであり、そこにはさらに沓冠歌の内部を四季・恋の主題に詠み分ける、という凝った方法が導入されている。既に指摘されているように、[23]家集に見える順の「あめつちのうた」でも、「返し」を詠む際に、その内部を四季・恋に分ける方法がとられている。これらの状況は「源順百首」の作者が順であることを支えるものであるように思われる。

順の家集に見える屏風歌作品には、好忠などの表現が多く流れ込んでいるという指摘もあり、こうした順と好忠の和歌詠作での交流を背景に置いたとき稿者は、好忠にとって百首歌の送り手として最もふさわしく、かつ本百首の特性を実現し得るのは、やはり順であろう、という結論に達するのである。

注

(1) 小谷博泰氏「曽禰好忠および源順集の用語に関して―源順作百首の作者は好忠である」(国文　研究と教育・八号・昭60・3)など。

(2) この問題については、島田良二氏『平安前期私家集の研究』(桜楓社・昭43・4刊)「曽禰好忠集」の中で整理されている。

(3) 拙稿「天徳四年内裏歌合と初期百首の成立」(三田国文・十四号・平3・6)

(4) 「曽丹集の一つの問題―曽禰好忠作百首和歌といわゆる源順作百首和歌―」(和歌文学研究・二五号・昭44・12)

(5) 「源順の歌風について―源高明大饗屏風歌を中心に―」(古典論叢・二二号・平2・8)

(6) 「源順歌の表現―好忠および河原院周辺歌人詠との関連―」(和歌文学研究・六四号・平4・11)

(7) 以下で引用する本文・歌番号は、私家集については原則として『私家集大成』に拠り、勅撰集・私撰集については『新編国歌大観』に拠る。「源順百首」は『曽禰好忠集』の歌番号を記す。

(8) この点については、柏木由夫氏「後拾遺和歌集私注(3)」(昭和学院短期大学紀要・昭58)に言及がある。

(9) この件については、平田喜信氏「和泉式部百首の成立」(『平安中期和歌考論』新典社・平5・5刊)

小松登美氏「和泉式部百首歌群小考」(跡見学園短期大学紀要・二二号・昭61・3)に言及がある。

(10) 拙稿「初期百首の季節詠―その趣向と性格について―」(国語と国文学・平5・8)

(11) 『曽禰好忠集全釈』(神作光一氏・島田良二氏・笠間書院・昭50・11刊)以下、『全釈』と略称させて頂く。

(12) 川村晃生氏『摂関期和歌史の研究』(三弥井書店・平3・4刊)序章

近藤みゆき氏「『見渡せば』と『眺望』詩」(『古今集と漢文学』和漢比較文学叢書第十一巻・汲古書院・平4・9刊)

(13) 水辺立春詠の和歌史的意義については、川村氏前掲著書、第二章・第二節・三「季節と歌枕」にご論がある。

(14) 当該屏風歌は、康保二(965)年の成立と考えられている。

(15) 「曽禰好忠『毎月集』について―屏風歌受容を中心に―」(国語と国文学・平3・9)b～d、f・hの歌についても言及がある。

(16) この点については前掲(10)の拙稿で言及した。

(17) 近藤みゆき氏「平安中期河原院文化圏に関する一考察―曽祢好忠・恵慶・源道済の漢詩文受容を中心に―」(千葉大学教養部研究報告・A―22・平2・3)では、「繁りあう」夏草を詠むという流行の諸相について述べられている。また、久保木寿子氏「初期百首と私家集―好忠百首を中心に―」(『王朝私家集の成立と展開』風間書房・平4・1)では、初期百首夏草詠の背景について説かれている。

(18) 前掲(10)に同じ。

(19) 但し、『後撰集』冬・477・よみ人しらずの「氷こそいまはすらしもみよしのゝ山のたきつせ音も聞えず」からの直接的影響も想定される。

(20) この点については、前掲(9)小松氏論文に言及されている。

(21) 前掲(15)論文、および「重之百首と毎月集」(国語と国文学・平4・10)。この中で、『毎月集』の「神まつり」「鷹狩り」等の屏風歌的背景について指摘されている。

(22) 前掲(17)久保木氏論文に言及がある。また、原田真理氏は「和歌の趣向とその意味するもの―順と好忠の歌群を中心に―」(『平安文学論集』風間書房・平4・10刊)で、順と好忠の遊戯歌について論じられている。

(23) 前掲(2)島田氏論文。

(かねこ　ひでよ)